

第5回 石岡市文化財調査報告会 発表要旨

石岡市旧市街地の町家 看板建築を中心に	藤川昌樹	2
水戸線の開業 常陸鉄道との競願をめぐる	川俣正英	4
石岡いいね！ いにしへの先人の想いに心を馳せ	田口裕哲 田口園美	14
東田中遺跡（4区） いにしへの海辺のくらし	作山智彦	16
三村地藏窪貝塚、東田中遺跡の動物遺体	阿部きよ子	20
鹿の子遺跡 縄文時代の「落とし穴」	谷仲俊雄	26

2019

石岡市教育委員会
常陸風土記の丘

例言

1. 本書は、2019（令和元）年8月3日（土）に開催する「第5回 石岡市文化財調査報告会」（主催：石岡市教育委員会、共催：常陸風土記の丘）の発表要旨です。
2. 本書の執筆は各報告者が行いました。編集は石岡市教育委員会 文化振興課が行いました。
3. 報告会の開催にあたり、下記の方々からのご協力とご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

公益財団法人茨城県教育財団
つくばみらい市立十和小学校

桜川市教育委員会

第5回 石岡市文化財調査報告会 プログラム

開催日 2019（令和元）年8月3日（土）

会場 常陸風土記の丘 研修室

10:00	石岡市旧市街地の町家 —看板建築を中心に—	藤川昌樹
10:40	水戸線の開業 —常総鉄道との競願をめぐって—	川俣正英
11:20	石岡いいね！ —いにしえの先人の想いに心を馳せ—	田口裕哲 田口園美
12:00	休憩	
13:00	東田中遺跡（4区） —いにしえの海辺の暮らし—	作山智彦
13:40	三村地藏窪貝塚，東田中遺跡の動物遺体	阿部きよ子
14:20	鹿の子遺跡 —縄文時代の「落とし穴」—	谷仲俊雄
15:00	関連展示「石岡を掘る5」展示解説	

石岡市石岡地区

筑波大学 藤川昌樹

はじめに

筑波大学社会工学専攻では、2015年度から継続して石岡市の旧市街地・農村景観についての調査を市から受託している。旧市街地については、これまでに旧水戸街道(中町通り)の連続立面図の作成、歴史的建造物悉皆所在調査、旧吉田カツ店・旧近清書店をはじめとする計9件の住宅(店舗兼用住宅を含む)の実測調査等を実施してきた。本報告では、この調査の成果を発表することにしたい。なお、以上と平行して茅葺き建物の悉皆調査、茅葺き建物の屋根葺き替え・改修も行っているが、これについては別の機会に改めて報告する。調査は大学院のワークショップ(実習科目)として実施され、多くの大学院生の参加を得た。

石岡の大火と看板建築

昭和4年(1929)3月14日に、石岡の市街地は大火に見舞われた。そして大火の復興の過程で、旧水戸街道の拡幅と駅前通りである八間通りの整備が行われるとともに、商人たちは道に沿って「看板建築」と称される町家建築を石岡の建てるようになった。

この看板建築とは、木造建築でありながら、通りに面して洋風のファサード(正面の垂直な壁面)を有する店舗兼住宅で、関東大震災(大正12年(1923))後の東京・下町で流行したものである。看板建築では、銅板・モルタル・スクラッチタイルがその表面の仕上げに用いられることが多かった。

石岡の看板建築の特徴

調査の目的の一つは、石岡の看板建築がいかなる特徴を持つのかを明らかにするという点であった。ちょうど調査を開始した2015年6月から8月にかけて、石岡市立ふるさと歴史館において第2回企画展「左官・土屋辰之助と石岡の看板建築」展が開催されていた。この展覧会に伴う調査により、左官職人である辰之助の活躍により、優れたモルタル洗い出し仕上げが石岡の看板建築には用いられていたことが分かった。筑波大学の調査では、個々の建築の実測調査を行い図面化して、特徴を解明することとした。

立面図を作成することで判明したのは、石岡の看板建築には間口が4間程度(7m強)で、二階建てで高さが8-9m程度のものが多かったことである(図1)。この結果、ほぼ正方形のファサードを持つ建築が多く、また他の建物の高さもほぼ同様で、中町通りには整った街路景観が広がっていることが分かった。東京では間口がより狭く、3階建ての看板建築も珍しくないから、この点が石岡の特徴と言って良いであろう。

看板建築の内部の実測調査では、現在ではサイディングに隠されているが内部に旧来のファサードが残っているものもあること、一階の店舗が拡大されることにより階段が付け替えられているものがあること、二階の座敷が発達しており、今でも残されていることなどが判明した(図2)。

看板建築以外の町家

立面の調査を通じて、看板建築以外の町家も残されている可能性が高いことが判明した。このため2016年の調査では、旧市街地中心部(中心市街地活性化基本計画対象地区内)の歴史的建造物について悉皆の所在調査を実施した。これは、町の中を歩き回って軒先ずつ台帳を作成し、その建築の特徴を書き込むというものである。この結果、江戸型の町家、和洋折衷型町家、近代和風住宅などを含む590棟の歴史的建造物がいまなお石岡の中心部には残されていることが判明した(図3)。

これらの町家についても少しずつ実測調査を開始しており、大火後に多様な様式を持つ優れた町家建築が建設されていたことが解明されつつある。

おわりに

石岡の市街地は、その長い歴史を反映して魅力的な歴史的景観を有している。我々の調査が明らかにしたのは未だその一端に過ぎないであろう。今後も特質を解明する作業を続けていきたいし、そこから進んで町並みを保全し、さらに魅力的な町並みとなるように協力したい。

文献

- ・平井恵理ほか「石岡市の町並み景観の特徴と看板建築」『日本建築学会大会学術講演梗概集』建築史・意匠（以下、『梗概集』），pp.325-326，2016年8月
- ・今井文子ほか「石岡市の看板建築における店舗空間の拡大とその影響」『梗概集』，pp.327-328，2016年8月
- ・徐暢ほか「石岡市旧市街地における歴史的建造物の残存状況」『梗概集』pp.59-60，2017年8月

- ・大井菜摘ほか「旧和泉屋戸田邸の建築的特徴」『梗概集』，pp.61-62，2017年8月
- ・宋宇賢ほか「水西酒店の建築的特徴」『梗概集』，pp.597-598，2018年9月
- ・麻田亜澄真「中藤米店の建築的特徴」『梗概集』，pp.599-600，2018年9月
- ・掛神有希奈ほか「前忠商店」の建築的特徴『梗概集』，pp.601-602，2018年9月

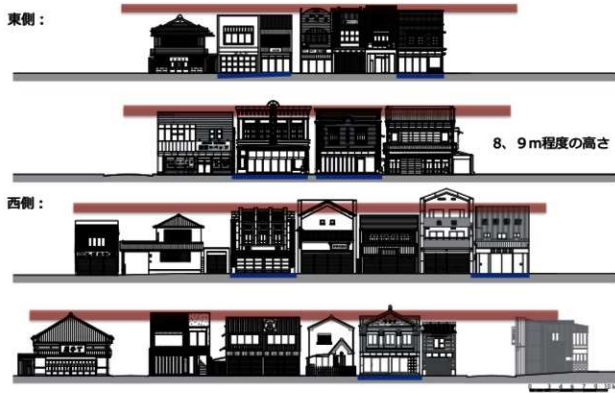


図1 中町通り沿いの連続立面図

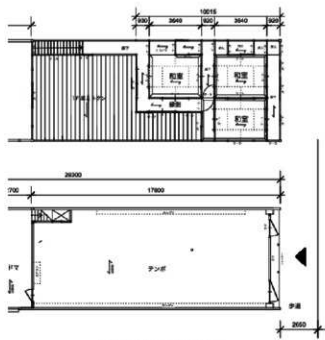


図2 近清書店平面図

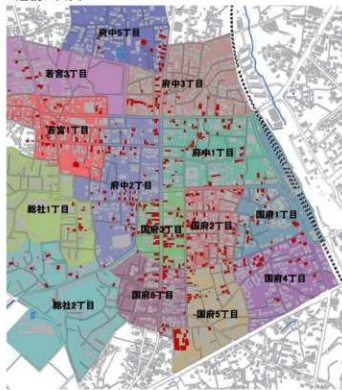


図3 歴史的建造物の分布

茨城県水戸市～栃木県小山市

桜川市教育委員会 川俣正英

石岡市の鉄道関係展示

石岡市立ふるさと歴史館では、第9回企画展として、「鉄道の時代に描いた夢—明治～昭和初期の鉄道計画と石岡の先人たち—」を開催しました（平成28年8月30日～11月27日）。本展は、「鉄道の時代のはじまり」「明治初期の石岡～県内最大級の商都～」「まぼろしの水戸線『南線』と常総鉄道」「日本鉄道土浦線（現常磐線）の開通」「明治後期の石岡～醸造家たちの隆盛～」「鹿島参宮鉄道（第1次）と霞浦鉄道のとん挫」「鹿島参宮鉄道（第2次）の開通と濱平右衛門」「水戸電気鉄道、石岡に至らず」「まぼろしの加波山鉄道」のテーマで構成され、現在も運行中の鉄道、廃線となった鉄道、実現には至らなかったまぼろしの鉄道、これらの鉄道敷設に関わった石岡の先人たちに焦点をあてた展示でした。この展示は、石岡市及び周辺各地に関わる、明治から昭和初期にわたる鉄道関係の展示でした。そして、従来取り上げられなかった鉄道史の展示は、画期的な企画でもありました。

水戸線開業130周年

前記の企画展で取り上げられたJR東日本の水戸線（小山～友部）は、茨城県最初の鉄道会社である、水戸鉄道会社によって明治22年（1889）1月16日に開業（小山～水戸）されました。平成31年1月16日に、開業130年の記念の日を迎えました。JR東日本水戸支社では、開業130周年記念事業として、「スタンブラリー」を水戸・友部・笠間・下館・結城・小山の6駅で実施しました（1月12日～2月11日）。また、1月19日には、開業記念列車が下館（始発）～水戸（終点）間で運行されました。

茨城県内を走った最初の鉄道

明治18年7月16日、日本鉄道会社第二区線（現JR宇都宮線）が大宮（埼玉県さいたま市）～宇都宮（栃木県宇都宮市）間に開通しました。この時、茨城県の西部に位置する古河市内で、茨城県内初の鉄道が走り、古河駅が最初の駅として誕生しました。

茨城県内に鉄道という夢との出会い

明治19年5月3日午前6時、日本鉄道会社第一区線上野駅に福沢諭吉（慶應義塾学頭）・小幡篤次郎（交詢社幹事）・濱野定四郎（慶應義塾校長）・岡本貞然（交詢社）・渡辺治（時事新報記者）の5人がいました。福沢一行は、上野～小山を汽車で、小山～笠間間を人力車、笠間～水戸間を馬車（福沢が乗車）や人力車（福沢以外の4人）で移動しました。4日には、徳川光圀ゆかりの常陸太田の町を、飯村丈三郎・立川興・名越時孝の3人が同行して、探訪しました。5日には、水戸市内を歴遊した後、借楽園内の好文亭で開催の有志者招待親睦会に招待されました。この会の総代は、飯村丈三郎など5名でした。福沢はこの席上で、文明開化・殖産興業・鉄道敷設の効用などを語りました。6日には石岡を通過して土浦に赴き、同地で歓迎会に参加。福沢はここでも鉄道の話をしたことでしょう。福沢一行は、同夜、色川三郎兵衛宅に宿泊。7日には、松戸を経て、東京に帰りました。

鉄道敷設という夢への階段

福沢一行の水戸来遊以後、同年夏から秋の頃、水戸市内の豪商などが鉄道敷設への夢を少しずつ育てていきました。彼らは、同年12月に入ると、安田定則茨城県知事へ鉄道敷設の要望を伝えました。同月20日頃には、安田県知事、川崎八右衛門（東京・川崎銀行頭取）、水戸市内の豪商たちで鉄道敷設案・株金・会社のことなどに関する話し合いがもたれました。

茨城県鉄道史研究では、従来、安田県知事の主張、川崎八右衛門の提案などが水戸鉄道敷設の契機と言われてきました。安田県知事は、同年5月8日に茨城県令、同年7月19日に茨城県知事に任命されました。安田県知事はハイカラな知事で、水戸鉄道敷設の計画も知事の発案と言われてきました。

明治19年当時の新聞記事などを読むと、安田県令の任命以前に、水戸においては福沢諭吉一行の水戸来遊によって鉄道敷設の効用が語られ、そのことから鉄道敷設への動きが加速化していったと思われます。鉄道の敷設には、知事や東京の財界人たちの支援や協力がなければ、大きなプロジェクトは達成できないのですが、地域住民

の発意・願望が大きな原動力であったことと思われます。

鉄道敷設への動き〈水戸鉄道 その1〉

明治19年12月、安田県知事・川崎八右衛門・水戸の豪商たちの鉄道敷設の会議で、会社の設立・株金の募集などの具体的な話し合いが進められました。株主は東京の財界人、水戸や常陸太田の豪商などですが、希望者が多数集まり、予定の金額に達してしまいました。

その後、知事は鉄道布設方法取調委員として、水戸方面では飯村丈三郎・塚越・大森平兵衛・富田彦市の4名、土浦・石岡方面では色川三郎兵衛・笹目八郎兵衛・村田宗右衛門・金子源兵衛の4名を任命しました。

20年1月、先月に県庁で会合をした水戸方面の人々（飯村丈三郎・塚越）が、鉄道敷設請願の手続きを進めるため上京します。安田県知事も鉄道敷設の動きに歩調を合わせて上京します。水戸鉄道会社の創立発起人（4名）は、1月19日に「水戸鉄道敷設請願書」を知事宛てに提出し、翌20日に知事から国に上進されました。

鉄道敷設への動き〈水戸鉄道 その2〉

国に上進された請願書は路線の敷設場所が不明確なため、実地測量に基づき敷設の可否を判断して再提出という命令が出されました。同年3月、水戸鉄道会社は鉄道局に依頼し、測量を実施しました。北線（水戸―内原―穴戸―笠間―岩瀬―下館―結城―小山）、南線（水戸―見川―鯉淵―岩間―羽鳥―石岡―新治―下稲吉―藤沢―小田―君島―下妻―結城―小山）の南・北2線案で測量が行われました。その結果、北線案の距離が南線案よりも約18km短かったです。短距離の場合、工事費用が安く、工事時間も短期間でできるメリットがあります。また、南線沿線では、霞ヶ浦・利根川・鬼怒川などの水運業者との競合が懸念され、鉄道敷設後の運行では支障となると考えられました。そこで、水戸鉄道会社は北線案での敷設を決定して、再請願をしました。

鉄道敷設への動き〈常総鉄道 その1〉

水戸鉄道会社が明治20年1月に鉄道敷設請願のための動きを開始した時のことです。土浦・石岡方面の鉄道布設方法取調委員4名は、明治20年の新年を迎え何らかの連絡があるものと思っていたのですが、何ら連絡がなかったため、事態確認のために県庁へ向出きました。彼らは、水戸鉄道会社が既に動きを始めていることを知り、

急遽、土浦・石岡方面での鉄道敷設の動きを始めることになりました。

同年2月、県南・県西方面の14郡の有志者が会合し、常総鉄道会社の創立と鉄道の敷設の計画を進め、安田県知事宛てに請願書を提出しました。

鉄道敷設への動き〈常総鉄道 その2〉

明治20年4月7日、常総鉄道会社発起人：土浦町の色川三郎兵衛など14名が、常総鉄道会社創立請願書・同社定款を安田茨城県知事に提出しました。

県内を2分する鉄道「南線・北線」問題

明治20年4月、水戸鉄道会社と常総鉄道会社の2社が、県内で同時期に鉄道敷設請願をするという事態になりました。水戸鉄道会社の計画は水戸―小山間の敷設ですから、常総鉄道会社は県南・県西地域の利益、県下百年の大計ということで、安田県知事や磯貝静蔵県大書記官へ鉄道敷設請願の趣旨や熱意を訴え、歎願しました。安田県知事は、5月に国からの鉄道敷設に対する諮問に対して、水戸鉄道路線での敷設の優位を伝えました。

5月16日には、茨城県会議員21名が鉄道問題に関する事態解決のため、常総鉄道会社創立委員：村田宗右衛門・金子源兵衛・色川三郎兵衛・笹目八郎兵衛宛てに、両社の鉄道敷設請願とその主張点を考慮した調停・中和策を提案しました。①両社は合併する、②測量に基づき路線を再考する、③これ迄の株金の取扱を清算し、水戸鉄道会社は常総鉄道会社に3割を支払うことを提案しました。

5月19日、常総鉄道会社創立委員4名は、この調停策に対して異議無しという承諾の回答をしました。

鉄道敷設への動き〈常総鉄道 その3〉

5月18日、県南・県西方面14郡の総代たちは、伊藤博文内閣総理大臣に「茨城鉄道線路之義ニ付上言」を提出し、常総鉄道敷設許可のための陳情を行いました。

この上言は、「今や両線（水戸鉄道・常総鉄道の2路線のこと）一朝ノ方向ハ本県百年ノ利害ニ関スルヲ以テ有志会ニ於テ決定セル所ノ要領ヲ具陳シ此段奉言候也」の言葉で結ばれていました。

鉄道敷設の認許・不認許

5月24日、国は水戸鉄道会社の鉄道敷設請願を認許

し、常総鉄道会社には不認許の決定をしました。ここに、半年余りにわたる茨城県内外を大きく揺るがした鉄道問題は、新局面を迎えました。

水戸鉄道会社の対応

水戸鉄道会社では6月14日、社長：奈良原繁、取締役：川崎八右衛門（副社長）・天野仙輔・飯村丈三郎・堀載・山中隣之助・長谷川清、支配人：菊地永の会社役員を発表し、正式に会社が発足しました。そして、鉄道敷設の工事を行い、同21年11月3日の試運転を経て、同22年1月16日に開業しました。当日は、東京から多数の来賓を迎えて、盛大な開業式が挙行されました。

常総鉄道会社の対応

常総鉄道会社創立委員総代4名（色川・村田・金子・笹目）は、6月に鉄道敷設に関わる経緯を、「常総鉄道会社創立手続及其沿革」として刊行し、関係者に配付しました。発行数や配付先などは不詳です。この冊子は、石岡・土浦など県南・県西地区で鉄道敷設に関わった人々の行動・願いなどを知ることでできる貴重な史料です。

笹目家「鉄道敷設関係」文書の意義

石岡市高浜の笹目（笹目）家には多くの古文書が残されています。その中に、「鉄道敷設関係」の文書（9点）があります。詳細は表2の笹目家史料目録を参照してください。これらの文書には、従来の茨城県鉄道史研究ではあまり注目されてこなかった文書も含まれています。

NO1は、常総鉄道会社の創立以前の明治20年2月、土浦町の色川三郎兵衛などが安田県知事宛てに請願した文書です。県南・県西方面の14郡の有志者が鉄道敷設の熱意を嘆願していたことを物語っています。南線・北線問題の論争点や相違点などが覗えます。

5月18日、伊藤博文内閣総理大臣への請願・陳情の件は前記しましたが、NO2「茨城鉄道線路之義二付上言」はその草稿です（日付未記載）。文末に氏名の記載はありませんが、各所に推敲や熟考の跡が読み取れます。

NO3とNO9の史料からは、伊藤博文内閣総理大臣への陳情時の状況や心情が覗えます。

NO5「常総鉄道会社沿革ノ概略」は、6月刊行の「常総鉄道会社創立手続及其沿革」の草稿と思われる。

NO6には表題が付されていませんが、5月16日に茨城県会議員から提案された調停策の写しです。常総鉄

道会社創立委員からの回答の記載はありません。

NO7「水戸鉄道会社説明書」は、鉄道敷設で競願していた水戸鉄道会社関係の史料ですが、笹目家に何故残されているのかは不明です。内容は、鉄道敷設に関する鉄道建設諸費用などの貴重な情報が記載されています。

石岡市方面の鉄道史研究のために

常総鉄道関係の歴史研究では、『茨城県史料＝近代産業編Ⅱ』が基本史料でしたが、笹目家文書及び『伊藤博文文書 第111巻 秘書類纂 交通一』によって、常総鉄道及び同社に関係する新しい史実が分かりました。今後、石岡市内・外において、鉄道史料の発見に努め、鉄道史研究が進展することを期待します。

参考文献

- 『日本国有鉄道百年史 第2巻』（日本国有鉄道、昭和45年）
- 『茨城県史料＝近代産業編Ⅱ』（茨城県、昭和48年）
- 『伊藤博文文書 第111巻 秘書類纂 交通一』（ゆまに書房、平成26年）
- 中川浩一『茨城県鉄道発達史 上』（筑波書林、1980年）
- 秋山高志「水戸鉄道（初代）の歴史」『鉄道ビクトリアル』【鉄道図書刊行会】353号、1978年10月号）
- 森田美比「水戸鉄道の開業」『日本歴史』【吉川弘文館】572号、平成8年1月号）
- 『石岡市立ふるさと歴史館第9回企画展 鉄道の時代に描いた夢～明治～昭和初期の鉄道計画と石岡の先人たち～』（石岡市教育委員会、平成28年）
- 川俣正英「アーカイブズに見る茨城県初の鉄道会社誕生経緯—水戸鉄道会社・常総鉄道会社—」『茨城史林』【茨城地方史研究会】43号、2019年6月）

表1 水戸線開業130周年の主な歩み -水戸鉄道の開業時期～令和-

和暦(西暦)	月/日	主な事項・西暦	和暦(西暦)	主な事項・西暦
明治18年 1887	7/16	日本鉄道第二区線(現J東日本水戸・東北本線・宇都宮線)の大宮駅(埼玉県)～宇都宮駅(栃木県)が開通した。同路線では、古河駅が開業し、茨城最初の鉄道の駅となった。	19年	5/3 福沢諭吉などが水戸実業、水戸を常陸太田市内の見学、歓迎会などを行った。歓迎会では、鉄道の効用・殖産興業の必要性などを語ったとされる。5/3～6水戸、5/6～7土浦、5/7横倉、5/8高崎、5/9宇都宮、5/10大宮の順に開業し、全線が開業した。宇都宮、大宮、高崎、土浦、常陸太田、古河、宇都宮に茨城県知事に任命。
	12/2	水戸の交通士たちが、茨城側に鉄道敷設の要望を出した。		12/2 安田清三・川崎八右衛門(川崎組銀行頭取)・水戸の有志者などが、県庁で鉄道敷設・会社組織などを協議。知事が鉄道建設法取組委員:飯村丈三郎・福城、大森平兵衛、色川二郎兵衛、後日八百長橋、村田宗右衛門、金子源兵衛を任命。
20年	1/8	飯村丈三郎・福城が上京。1/10安田知事も上京。	1/9	鉄道敷設について、県からの連絡がないため、県庁に出向く。水戸鉄道会社が先行して動いたことを知る。独自の動きを模索。
	1/19	水戸鉄道会社(発起人:飯村丈三郎・福城・長谷川清・川崎八右衛門)が鉄道会社立書申請書を茨城県知事に出す。申請書には明記なし。	1/29	下妻で「鉄道評議会」を開催。県南・県西方面の関係者が参加。鉄道の利害について協議。
	1/20	安田茨城県知事から内閣へ同社の請願書送達。		
	1/22	1/17、水戸鉄道会社は日本鉄道会社に、水戸鉄道会社を日本鉄道会社の支線と見なし、測量・工事・運輸に際しての委託を申請・承認された。		
	3/	井上鉄道局長官は茨城路線の測量に基づいた再申請を指示。鉄道局による敷設路線の測量を実施。北線:水戸～笠間～下館～結城～小山南線。水戸～石岡～北条～下妻～結城～小山南線。北線は北線は特別長11マイル短く、工事費も30万円で安く、鉄・道・利根川水運との競合もないことから、北線採用と勧告。	3/20	石岡で演説会。4/5、土浦で演説会。 茨城県内での鉄道敷設に関して、県内をあけての論争が展開された。茨城鉄道問題として、「南線・北線」問題が新聞紙上で展開された。1～5月、新聞各紙により、支持・反対の見解が分かれた。
	4/15	発起人たちは、井上鉄道局長官の意見に基づいて北線案に決定し、線路図・工事予算書を送る。着手後2年以内に落成という通牒書を出す。	4/7	常総鉄道会社(発起人:色川二郎兵衛ほか13名)が鉄道会社の創立を請願。水戸～石岡～土浦～下妻～古河
			4/25	安田清三は、水戸鉄道会社の出願がなく、常総鉄道会社の申請には難があるとして、出願の取下げを希望したが却諾無し。やむなく政府に同社出願を上申。
	5/6	伊藤博文内閣総理大臣が、4/29井上鉄道局長官に水戸～小山間の鉄道敷設について諮問。		
		井上は、5/6水戸鉄道の南線・北線の決定基準、小山駅に接続し海産物の群鳥、栃木方面への旅路拡大などの利点・得失ながら、水戸鉄道の敷設に賛成し、常総鉄道の水戸～古河間の鉄道敷設については、東京への距離は水戸鉄道よりも近くなるが、前記の理由により敷設不可と答申。		
	5/16	茨城県内にて2つの鉄道問題が起る。茨城県会議員が鉄道問題解決のため、調停案の提案。①両社の合併、②社名の変更、③敷設路線の再検討、④株金の取扱いなど。水戸鉄道会社は不承認。常総鉄道会社は承認。	5/18	5/6石岡。5/8下妻で集会。県南・県西方面の鉄道敷設の動きが活発。県会議員に賛成もあつたが、県府・県政13部の代表者が伊藤博文内閣総理大臣へ鉄道敷設の陳情。
	5/20	安田副知事は、5/15、5/20に水戸鉄道会社の出願許可を政府に答申。		
	5/24	国は水戸鉄道会社の鉄道敷設を認許。	5/24	国は常総鉄道会社の鉄道敷設を不認許。 6/ 「常総鉄道会社創立及其資本」の刊行。鉄道敷設活動全般の事実処理がいづれ収束したかは不詳。
	6/14	井上鉄道局長官から「水戸鉄道会社命書」を交付。同社の建設計画を認可。水戸鉄道会社が正式発足。社長:奈良義典(日本鉄道会社社長兼任)。取締役:川崎八右衛門・長谷川清・天野仙舟。飯村丈三郎。本社は東京府日本橋区椿町。資本金は10万0千円。		
	7/30	水戸線の建設工事は日本鉄道会社の支線と見なし、官設鉄道での建設を請願。承認された。		
	8/10	鉄道局長官官立独立太田水戸鉄道支線の担当となった。		
	8/29	小山に出張所を置き、路線測量から工事がスタートした。		
	11/	小山～水戸間の建設工事を止。		
21年	11/3	茨城縣会選挙		
22年	1/16	水戸鉄道の開業。水戸～内原～太田町(現大宮)～笠間～岩瀬～下館～結城～小山。 約45km(約66.9km)。約2時間40分。 開業式(水戸駅)には来賓約300名、観客各地からも多数の参列、盛大な式典を挙げる。 開業以來、鉄道会社の営業を日本鉄道会社に委託。 水戸線各駅の開業(臨時) 水戸～備前(臨時:114.2.2)～赤塚(M27.1.4)～内原～友部(M28.7.1)～穴戸(太田町,M22.5.25穴戸に改称)～笠間～稲田(M31.5.8)～福原(M23.8.1)～羽黒(M37.4.1)～岩瀬(大和(M63.6.20)～新治(M28.9.15)～下館～玉戸(M63.6.20)～川島(M伊佐山,M22.4.16,M22.5.25川島に改称)～東結城(S12.12.1)～結城(小田原(S30.4.1)～小山(日本鉄道会社,M18.7.16)		
23年	10/29	明治天皇御訪問の車庫警備員のため水戸訪問。水戸鉄道会社関係者に歓迎と下賜金(1000円)。		
24年	11/26	水戸～常陸河内間の開通。常陸河内は、常陸河内本線の貨物の積込のため新設された。		
25年	3/6	水戸～常陸河内間の開通。常陸河内本線。常陸河内本線。常陸河内本線。常陸河内本線。		
28年	11/4	日本鉄道十勝線(女部～十勝間)が開通。		
29年	12/25	日本鉄道十勝線(十勝～田原[東京方面]、岡田川線[田原～岡田川線])が開通。水戸と東京が直結。		
30年	4/	陸奥支線(初代)赤水戸駅開設に竣工。碑石の刻字には、「明治30年4月」とある。		
31年	12/25	日本鉄道十勝線(水戸～田原)が開通。		
34年	1/	上野線・奥田川線・水戸線(女部～水戸)・磐城線を総括して廃止された。		
39年	11/1	日本鉄道会社が国有化。		
42年	10/12	国有鉄道の線路名替の決定。水戸線(小山～友部)。常磐線(田原～岩瀬)。水戸鉄道当初の水戸～友部間は常磐線となった。令和現在も水戸線の名称を使用。水戸線の列車は、常磐線水戸駅への乗り入れ列車も運行。		
昭和11年 1936	10/29	「鉄道の碑」(初代)が水戸駅前に移設。碑銘儀式式を挙げる(大正4年水戸駅の火災による駅の改築に伴い、磐城北東線に移設。昭和4年の特別大宮修築のため水戸駅前整備で壊去。撤去の場所は不明。昭和11年に再移設。昭和20年戦災。水戸駅前の戦後復興時に撤去・処分。その後の経緯は不詳)。		
	2/4	日本国有鉄道が発足。		
	3/9	「陸奥支線」(2代目)が再設立された。日付は碑石の刻字による。設置場所は水戸駅北口。		
	4/2	水戸線開業50周年。記念列車が水戸～下館間(往復)で走った。		
	5/9	水戸線開業55周年。記念列車が水戸～下館間(往復)で走った。		
	7/1	水戸線開業60周年。記念列車が水戸～下館間(往復)で走った。		
	7/1	日本国有鉄道が民営化された。東日本旅客鉄道株式会社(JR東日本)となった。		
	6/24	水戸線開業70周年。水戸～小山間の各駅で、祝賀行事やイベントが行われ、祝賀列車が走った。		
64年	1/16	水戸線開業100周年。水戸～小山間の各駅で、祝賀行事やイベントが行われ、祝賀列車が走った。		
平成11年	1/10	水戸線開業110周年。水戸～小山間の各駅で、祝賀行事やイベントが行われ、祝賀列車が走った。		
21年	1/10	水戸線開業120周年。水戸～小山間の各駅で、祝賀行事やイベントが行われ、祝賀列車が走った。		
24年	1/10	水戸線開業125周年。水戸～小山間の各駅で、祝賀行事やイベントが行われ、祝賀列車が走った。		
28年	1/10	水戸線開業130周年。水戸～小山間の各駅で、祝賀行事やイベントが行われ、祝賀列車が走った。		
31年	1/10	水戸線開業130周年。水戸～小山間の各駅で、祝賀行事やイベントが行われ、祝賀列車が走った。		
令和元年	6/28	飯村丈三郎が元水戸駅長に就任。水戸線の駅員立ち上げ飯村丈三郎(常磐線)。		
	8/3	水戸線開業130周年記念列車が水戸～下館間(往復)で走った。水戸線開業130周年記念列車が水戸～下館間(往復)で走った。(石岡市)。		

注:太田町・水戸鉄道会社の創立経緯、日本鉄道会社、日本国有鉄道、JR東日本の開業年などに区分し、表記した。
 出典:『日本国有鉄道百年史』第2巻(昭和4年8月)、『茨城県史』近代産業編(昭和4年8月)、『茨城県史』(茨城県、昭和4年8月)。
 中川浩一『茨城県鉄道発達史』上、『茨城県鉄道発達史』下(筑波書林、1980年)、明治期の各種新聞記事など

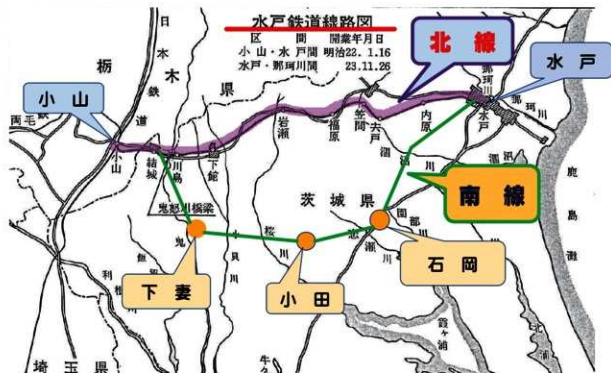


図1 水戸鉄道線路図（南線・北線）

明治20年3月の実測図をもとに作成しました。



図2 水戸鉄道（北線）・常総鉄道（南線）路線案（明治20年4月）

常総鉄道路線案は実測図面がないため敷設計画地の地名で路線を想定しました。

常総鉄道の発起人たち ～石岡の発展をけん引した人々 其の1～



▲明治20年4月に東京第一回常総鉄道発起人大会で開演。『常総鉄道開業』(昭和11年印刷)

石岡町から常総鉄道の発起人として名を連ねているのは、村田宗右衛門、金子源兵衛、濱平右衛門、矢口大次郎の4人。高浜からは笹目八郎兵衛の名がみえます。



村田 宗右衛門 1843-1901 (石岡町) 街随一の豪商

村田家は、江戸後期に陸前浜街道(江戸-仙台)随一と謳われた豪商で、明治治期には酒・醤油醸造や郵便事業を行った。酒造米の精米に蒸気機関を用いるなど進取の気風をもち、晩年には専売局建設のため屋敷2,000坪を国に寄付。この敷地は現在国府公園として市民の憩いの場になっている。



金子 源兵衛 1854-1904 (石岡町) 県内一の醤油醸造家

醤油醸造を行っていた金子家は、屋号を「金源」と言った。この時代は、高浜から舟で東京に出荷するなど販路を広げ、生産額は県内随一でした。明治22年には石岡銀行を創立して頭取を務めたほか、明治33年から同37年まで県議会議員として県政の発展に努めた。



濱 平右衛門 (石岡町) 若くて次代にバトンを渡した醸造家

濱家は代々「平右衛門」を襲名する醤油の醸造家で、商号は「山吉」。明治20年当時の平右衛門は、その後若くして世を去り、16歳で家業を継いだ次代の平右衛門は、後に鹿島参宮鉄道株式会社を設立して社長に就くなど石岡の発展に大きく寄与することになる。



矢口 大次郎 1853-1934 (石岡町) 8期務めた初代石岡町長

矢口大次郎は、江戸時代に府中宿の本陣を務めた家に生まれ、東京で修学した後、石岡小学校の前身である第二八番中学区第四校で教員を務めた。明治20年に官選の石岡戸長(知事が任命する行政事務の責任者)、明治22年の町村制実施で初代石岡町長となり、以降8期32年にわたって町の発展に尽力した。



笹目(篠目) 八郎兵衛 1844-1895 (高浜村) 交通界の大立者

笹目(篠目)家は高浜で代々名主を務める一方、古くから回清間屋を営んだ。設ヶ浦の高波や街道の悪路で荷が滞るのを避けるため、汽船輸送や車馬による陸運を開発。高浜に常磐線を通す際も大きな力を発揮したといわれる。明治14年と同21年には県議会議員に選出され、県勢発展にも尽力した。

図6 常総鉄道の発起人たち～石岡の発展をけん引した人々 其の1～

(「石岡市立ふるさと歴史館第9回企画展
鉄道の時代に描いた夢—明治～昭和初期の鉄道計画と石岡の先人たち—」)

表2 笹目家史料目録

NO	史料名	作成者	宛先	年月日
1	茨城鉄道線路之義ニ付請願書	土浦町色川三郎兵衛他43人	茨城県知事安田定則	明治20年2月
2	茨城鉄道線路之義ニ付上言(茨城県下拾三部有志者上言之原稿)	(なし)	(なし)	(なし)
3	南部請願義ニ付(控)	県会議員色川三郎兵衛・鉄道敷設人總代金子源兵衛他二人	伊藤総理大臣執事	明治20年5月7日
4	茨城県鉄道之義ニ付建議書(下書)	(真壁郡有志惣代同郡大里村多賀谷彦四郎・同郡半谷村塚越彌一郎・新治郡有志惣代同郡石岡町大久保誠之助[後欠])	(不詳)	明治20年5月9日
5	常総鉄道会社沿革ノ概略(下書)	村田宗右エ門他二人	(なし)	(なし)
6	(鉄道敷設ニ関シ水戸鉄道会社常総鉄道へ尽力願)	谷田部町今川俊一郎他10人	常総鉄道会社創立委員 笹目八郎兵衛他3人	(なし)
7	水戸鉄道会社説明書	(なし)	(なし)	(なし)
8	(鉄道敷設ニ付・下書)	(なし)	(なし)	(なし)
9	(南線敷設ニ付嘆願・下書)	(なし)	(内閣総理大臣)	(なし)

石岡市高浜の笹目家史料目録は、番号・史料名・作成者・宛先・作成年月日の項目で整理されています。史料名などで、明かな誤記がある場合は訂正をしました。

表3 常総鉄道(南線)の敷設運動に関わった人々

笹目家史料 NO 1 の請願者 (明治20年2月)		伊藤博文への請願者 (明治20年5月)	
新治郡	土浦町 色川三郎兵衛・奥井敬 石岡町 村田宗右衛門・金子源兵衛 高浜村 笹目八郎兵衛 下玉里村 鈴木源之允	新治郡	土浦町 大塚新藏 石岡町 小林重吉
西茨城郡	押辺村 飯田詰三 平町村 立川利平 大田町村 鈴木重嗣 岩間下郷 塩畑政雄・町田作造 湯崎村 上野長三郎・前沢隆介 長兎路村 上野清八	(西茨城郡なし)	
東茨城郡	下飯沼村 東ヶ崎兵五 下土師村 皆藤登 蕎麦原村 小野瀬政之介 西郷地村 井坂伝弥	東茨城郡	小川村 中山儀八・井崎忠介・小仁所新介
筑波郡	北条村 市村庄次郎 筑波村 八木下信之	筑波郡	筑波町 広瀬暢三 北条村 市村藤治郎
行方郡	玉造村 大場惣助 麻生村 三好琢磨 牛堀村 坂嘉也・須田幹之介	行方郡	玉造村 大場惣助
鹿島郡	宮中村 小堀龜太郎・北條時成 萩原謙次・高安清右衛門	鹿島郡	宮中村 高安佐七・北條時紹
信太郎	興津村 坂本長左衛門 鳩崎村 関口八兵衛	信太郎	大形村 吉田倉之助
河内郡	龍ヶ崎村 岡島健之助・杉野次郎兵衛 岡田省三・岡野昌治	河内郡	牛久村 入江千代太郎
北相馬郡	取手駅 染野晋 下高井村 広瀬誠市郎	(北相馬郡なし)	
岡田郡	国生村 長塚源次郎	岡田郡	国生村 長塚源次郎
豊田郡	小島村 柴孫次郎 若宮戸村 小林康太郎 本宗道村 森隆介	豊田郡	川尻村 赤松新右衛門 田下村 山中茂一郎 伊古立村 飯泉善一郎
結城郡	結城町 若井治平	結城郡	菅谷村 大久保七郎兵衛
真壁郡	下妻村 内田林八・猪瀬兼吉・軽部斐	真壁郡	下妻村 内田林八・鈴木昭 猿島郡 大和田村 斉藤萬助 西葛飾郡 磯部村 堀江藤彌
【合計】	13郡44名	【合計】	13郡21名



図7 茨城鉄道線路ノ義ニ付上言（前半部）
伊藤内閣総理大臣への陳情（明治20年5月18日）
『伊藤博文文書 第111巻 秘書類纂 交通一』

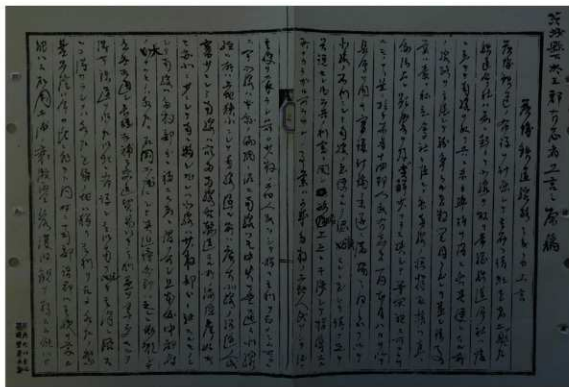


図8 茨城鉄道線路之義ニ付上言（前半部）
笹目家史料 NO 2 で、作成年月日の記載はありません。原稿用紙の
枠外に「茨城県下拾三郡有志者上言之原稿」とあり、5月18日に
伊藤博文内閣総理大臣に陳情した上言の原稿と思われます。笹目家
に史料が残されていることから、笹目八郎兵衛の起草と思われます。

地域おこし協力隊

人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、地域外の人材を積極的に受け入れ、地域協力活動を行いながら、そこでの定住・定着を図ることを目指します。そのことで、意欲ある都市住民のニーズに応えるとともに、地域力の維持・強化を図っていくことを目的として、2009年度より総務省により制度化された事業です。

都市地域から人口減少地域等の条件不利地域に住民票を移動し、生活の拠点を移した者を、地方公共団体が「地域おこし協力隊員」として委嘱します。隊員は、一定期間、地域に居住して、地域ブランドや地場産品の開発・販売・PR等の地域おこしの支援や、農林水産業への従事、住民の生活支援などの「地域協力活動」に従事します。活動期間は概ね1年以上3年以下です。

石岡市地域おこし協力隊文化財活用担当

2018年度は、6人の地域おこし協力隊が活動していました。隊員は5つの分野（中心市街地活性化・観光交流・農林業・移住定住・文化財活用）をそれぞれに担当し課題に取り組むと同時に、連携を取って分野を横断した活動を展開していきました。

その中で私たち2人は、教育委員会文化振興課に籍を置き、石岡市の歴史と文化を調査研究し、素人（プラス転入者）の立場から、石岡市の魅力の掘り起こしとPRに取り組みました。

市内の文化財、史跡や寺社などをわかり易く解説したガイドブック「石岡の歴史と文化」を手に、掲載されている場所と活動中に頂いた情報をもとに、百五十か所近く足を運びました。

延べ1500枚の写真と、自分たちの目と鼻と耳、そして、心で感じたことを研究成果としてまとめることができました。それらは、日々フェースブックで発信するとともに、書籍と映像（DVD）という形にもなり、1か月に及ぶ「ゆりの郷」での発表機会も得ることが出来ました。

調査の概要

- 1 調査を始めるにあたって
まず、石岡を知ることから始まる！！
石岡の道を知る！
石岡の土地を知る！
石岡の人を知る！
石岡の動きを知る！
石岡の歴史を知る！
石岡の歴史遺産を知る！

2 調査の目的

- (1) 石岡を知ること
- (2) 石岡の歴史と文化に触れること
- (3) 地域とのつながりを広げること
- (4) 文化財活用の糸口を探ること

3 調査方法

- (1) 調査は4つのアクションで！
アクション1 ⇨ 知る
アクション2 ⇨ 行く
アクション3 ⇨ 感じる・思う
アクション4 ⇨ 整理

(2) 調査の原則は現地に行く！

そして、

見る・聞く・触れる・感じる・思う！

4 調査計画

95のタイトルを28のグループに分け、3ヶ月の時間をかけて、現地に足を運ぶ計画を立てました。

5 調査結果の活用

活用に向けた整理

・資料（写真等）の整理

・感想の整理

（移住者らしく、素人らしく、自分らしく）

・伝え方の整理

- (1) 石岡をアピールする材料とする
- (2) 石岡の学びの資料とする
- (3) 地域おこし活動の検討材料とする

6 調査から見えてきたもの

(1) アピールできる魅力

「いいね」がいっぱいの石岡！！

自然が豊かな石岡！

景色がすてきな石岡！

古墳の多い石岡！

野菜が安全・おいしい石岡！

モダンな歴史の石岡！

深い歴史の石岡！

① 豊かな自然

- ・球状花崗岩 ・常陸風土記の丘
- ・加波山神社 ・吉生の砦

② 心に染み入る景観

- ・八木の干拓 ・朝日里山学校
- ・板敷山大覚寺 ・鳴滝

③ 人の生活が見える

- ・旧石岡市内看板建築 ・たばこ神社
- ・足尾神社 ・常陸風土記の丘

④ その時代に生きた人物の思いが伝わる

- ・佐久良東雄旧宅 ・常春寺
- ・泰寧寺 ・高浜神社

⑤ 歴史的価値が高い

- ・常陸国分尼寺跡 ・舟塚山古墳
- ・常陸総社宮 ・常陸国分寺跡

(2) 利活用に向けての課題

① 歴史遺産の維持・管理

- ・地域の人口の減少
- ・地域住民の高齢化
- ・生活スタイルの変化
- ・信仰に対する意識の変化
- ・価値観の多様化

歴史遺産
離れ

② 活用の物足りなさ

- アピール不足 ・呼び込む手だての弱さ
- 情報発信→窓口→案内表示→説明表示
- 企画不足
- ・ねらいを持つ（しぼる）
- ・規模（大小）
- ・継続⇔単発
- ・横のつながり

工夫が
必要

③ 歴史遺産のニーズとのずれ

現代人が求めているもの

・映像美（インスタグラム）

・話題性

・収集

④ 市民の思い

- 石岡市をもっと知りたい！
- ・歴史や文化遺産に興味がある
- 石岡市を生き生きとさせたい！
- ・地域おこしに興味がある
- 何かをやりたい
- 何かをやっている

○今の石岡市が好きだ！

- ・今の石岡が良い
- 今のままがいい
- ・観光客のマナーの悪さが困る
- 今のままでよい

(3) 課題解決への糸口

期待する活用や活動

- ・花と歴史遺産のマッチング
- ・世間遺産で意識の高揚
- ・歴史の中の物語をつなげる楽しさ

石岡、いいね！！

調査を実施する前は「何かしなくては！」と、活動することに意識を置いていました。実施後の今は、「何か」の内容に意識が向くようになりました。実現の可能性、効果の有無、継続性等を考えるようになった今、以前に増して石岡への興味が大きくなってきました。

すべてが新鮮で衝撃的だった石岡市地域おこし協力隊としての1年でした。日々の活動を通して石岡の良さや課題が見えた今では、以前とは違った見方で石岡を考えるようになってきたように思います。それは、他市町村との比較をするようになってきたことです。比較がすべて良いわけではないですが、比較から良さや改善点が浮かび上がることも事実です。

今後はまず、「石岡の歴史と文化」を点で見るのではなく、歴史のステージで理解を深めていきたいと考えています。そして、その後はそのステージを線でつなげるような見方をして、石岡のストーリーがストーリーとして繋がるようになれば、一段上の「石岡いいね！」が見えてくると考えています。

石岡市東田中

つくばみらい市立十和小学校 作山智彦

調査の概要

東田中遺跡は、石岡市の南東部、霞ヶ浦の高浜入りに注ぐ山王川左岸の標高約 20～25mの舌状台地上に立地しています。当遺跡では、公益財団法人茨城県教育財団によって1～6区の調査が行われています。1～3区では、縄文時代中期の竪穴建物跡（竪穴住居跡）や貯蔵用の土坑などがみつき、台地縁辺部に集落が広がっていたことが判明しています。また、マガキを主体とする地床貝塚が1か所確認されています。

4区の調査は平成25・26年度に、整理は平成30年度に行われました。4区は斜面部で、縄文時代の斜面貝層（貝塚）1か所、土坑4基、遺物包含層3か所などを確認しました。主な出土遺物は、縄文土器（深鉢・浅鉢・蓋・ミニチュア土器・有孔罅付土器・台形土器・壺形土器）、土製品（土器片・耳飾り・土製円盤・土器片円盤・匙形土製品・垂飾り）、石器（尖頭器・掻器・削器・鏃・打製石斧・磨製石斧・石皿・磨石・敲石・石錘・凹石・砥石）、石製品（耳飾り・垂飾り・軽石製品）、骨角器（釣針・ヤス・ヘラ・鹿角加工品・垂飾り）、貝製品（貝刀・貝輪・垂飾り・加工品）、自然遺物（貝類・魚骨・鳥骨・獣骨・植物）などです。遺物は収納コンテナに約500箱出土しています。遺物の大半は縄文土器片で、貝塚から約28,000点、第2号遺物包含層から約110,000点が出土しています。



第1図 東田中遺跡と霞ヶ浦の広がり

(上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2012年を改変)

主な遺構と遺物

約9,000年前から、縄文海進と呼ばれる海水面上昇が始まりました。この現象により、霞ヶ浦や周辺の低地には海水が浸入し、入江状の海が広がったと考えられています。海進の最盛期は縄文時代前期の約6,000年前で、海水面は現在よりも3mほど上昇していたと考えられています。当遺跡の貝塚が形成された中期は海退している時期ですが、霞ヶ浦と山王川の合流点まで約1.5kmの距離に位置する当遺跡周辺の低地は、内湾の湾奥部だったと考えられます。

当遺跡の貝塚は、このような環境下で形成されたものです。出土した貝類は海水域に生息するものが大半で、主観貝塚に分類されます。貝塚は斜面部の窪地に形成されているため、約25～35°の傾斜角で堆積していました。土器片や貝類などの遺物は、斜面部の高い場所から投棄され、斜面部の低い場所に堆積した結果、長軸約10m、短軸約8m、厚さ約2mの貝塚が形成されました。出土した土器から、貝塚は中期後葉（約4,500年前）のものと考えられます。

貝塚からは、38種類の貝類（貝製品を含む）が出土しています。集計作業の結果、最も多い貝類はマガキと考えられます。次いでウミナ、ハマグリとなり、これらの貝類で全体の約75%を占めています。その他の貝類の組成は、シオフキが約7%、サルボウが約4%、カワアイが約3%、アラムシロが約3%、ナミマガシワが約2%、アサリが約1%、オキシジミが約1%などとなっています。このほか、汽水域に生息するヤマトシジミやヒロクチカノコガイ、淡水域に生息するカワニナやマツカサガイなどの貝類、貝層で繁殖した陸生のキセルガイやマイマイなどが出土しています。

貝類について

貝層ごとに最も多い貝種を集計した結果、マガキ主体層、ハマグリ主体層、ウミナ主体層、ナミマガシワ主体層、シオフキ主体層が確認できました。貝層によって最も多い貝類が異なる理由として、入手しやすさ、貝を採る季節や場所、嗜好による意図的な採取などが考えられます。マガキやウミナは主に泥質の干潟に、ハマグ

りは主に砂泥質の干潟に生息している貝類です。貝類の組成や古環境から、身近に広がっていた干潟で貝類を採っていた可能性があります。出土した貝類の大きさは、小形のものが目立っています。マガキ、ハマグリともに2～3cmの大きさの殻が最も多く出土しています。

魚類・鳥獣類について

貝塚からは、台地上の遺跡では残りにくい骨類が出土します。当遺跡の貝塚でも、魚類、鳥類、獣類の骨や歯などが出土しています。調査の際は、貝塚を掘った土を捨てずに土のう袋に収納し、水洗作業を行いました。その結果、小形魚の骨や微小貝類なども拾い上げることができました。これらの自然遺物は、当時の人々の暮らしを考える上で良好な資料となります。

魚類は、アカエイ、トビエイ、サメ、サメ・エイ類、ウルメイワシ、ニシン亜科、ニシン科（イワシ^カ）、サヨリ、メバル、コチ、スズキ、ブリ、アジ、クロダイ、マダイ、タイ科、シログチ、サバ、ヒラメ、カレイ、アイナメ、ボラ、ハゼ、ウナギの24種類が出土しています。身近な内湾から河口付近において、小形の魚を捕獲することを中心とした漁労活動が行われていたと考えられます。漁労具としては、釣針、ヤス状刺突具、土器片錘、石錘、浮子とみられる軽石製品が出土しています。釣針が少なく、土器片錘が多いことから、投網漁や刺網漁のような網漁が盛んであったと考えられます。

鳥類は、キジ科、カモ科、カラス科、クイナ科などが出土しています。なかでも、キジ科やカモ科の骨が多く出土しています。

哺乳類は、イノシシ、ニホンジカ、ノウサギ、イヌ、タヌキなどの骨が出土しています。イノシシの骨が最も多く、中でも幼獣が多いと考えられます。イヌは縄文時代に狩猟用として飼育されていたといわれています。イノシシやニホンジカの骨、角、歯などは、骨角器として利用されています。

調査の成果

当遺跡の貝塚の特徴として、小形の貝類が多く出土しているという点が挙げられます。小形の巻貝については、身を利用するだけではなく、出汁としても利用されたという説もあります。また、中期において内湾の奥部に形成された貝塚は、地点貝塚と呼ばれる小規模のものが多い中、厚さ約2mの斜面貝層が形成されたことも特徴の

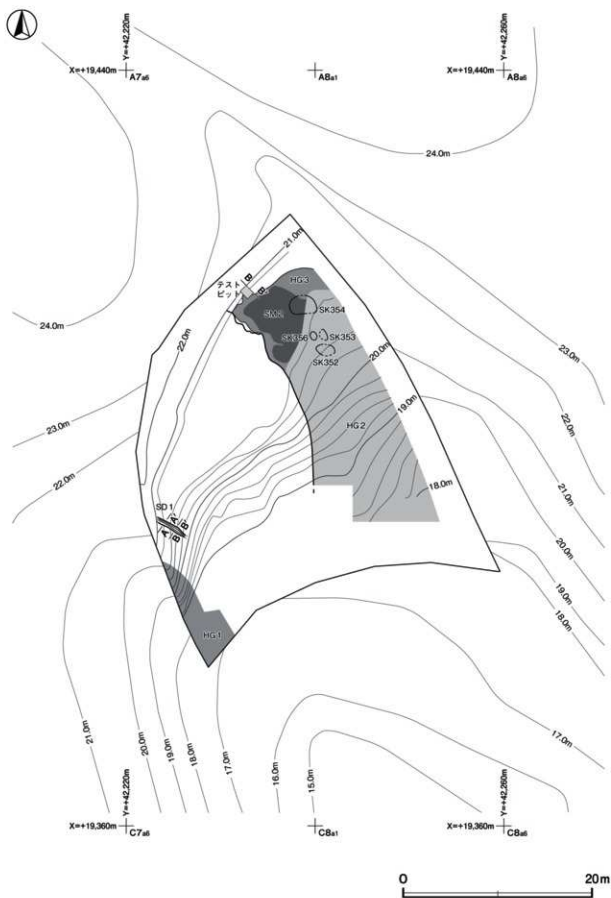
ひとつです。身近に広がっていた干潟で入手しやすかったとみられるマガキやウミノシナなどの貝類、湾内や河口付近で捕獲できた魚類は、当時の人々にとって利用価値の高い食料資源だったと考えられます。これらの水産資源や鳥獣類を安定して入手できる環境は、定住する上で重要な条件のひとつといえるでしょう。

今回の調査で、貝類、魚類、鳥獣類などの食料資源の利用状況がわかり、霞ヶ浦沿岸における漁労活動、狩猟活動、採集活動などについて検討するための資料を蓄積することができました。

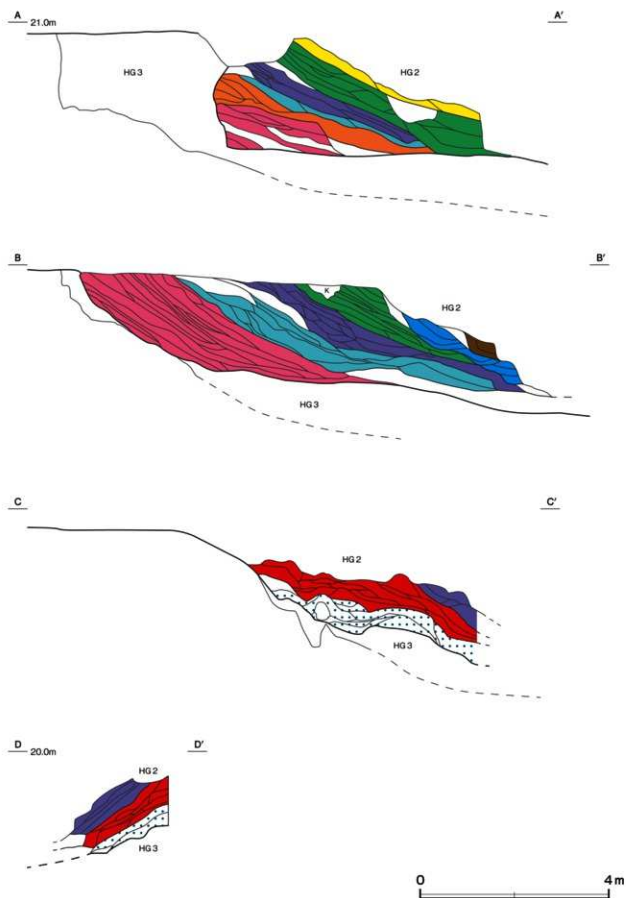
石岡市内では、宮平遺跡と三村城跡で中期に形成された貝塚が確認されています。それぞれ土坑内の覆土中に形成された地点貝塚です。カキやウミノシナが多く、当遺跡における貝類の様相と類似しています。今後、霞ヶ浦沿岸において貝塚調査例が増加したり、当遺跡の今後の報告を踏まえた検討を行ったりすることで、当時の社会や生業の様子などにさらに迫ることができると期待しています。

参考文献

- 安藤敏孝ほか『宮平遺跡発掘調査概報』石岡市教育委員会 1989年3月
- 石川功『海と河と縄文人—霞ヶ浦の古環境と遺跡—』上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2012年3月
- 木村光輝・海老澤隆『東田中遺跡 中津川遺跡2 一般国道6号千代田石岡バイパス（かすみがうら市市川～石岡市東大橋）事業地内埋蔵文化財調査報告書8』茨城県教育財団文化財調査報告第407集 2016年3月
- 栗田功『三村城跡 一般県道飯岡石岡線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第299集 2008年3月
- 作山智彦・見越広幸『東田中遺跡2 一般国道6号千代田石岡バイパス（かすみがうら市市川～石岡市東大橋）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書10』茨城県教育財団文化財調査報告第434集 2019年3月
- 関口満・亀井翼『霞ヶ浦の貝塚研究史』『霞ヶ浦の貝塚と社会』明治大学日本先史文化研究所 先史文化研究の新視点V 雄山閣 2018年2月
- 西野雅人『縄文中期の大型貝塚と生産活動—千葉市有吉北貝塚の分析結果—』『千葉県文化財センター研究紀要』19 千葉県文化財センター 1999年3月



第2図 東田中遺跡4区遺構全体図（茨城県教育財団文化財調査報告第434集より引用）



第3図 第2号貝層実測図（茨城県教育財団文化財調査報告第434集より引用）

三村地蔵窪貝塚，東田中遺跡の動物遺体

石岡市三村，東田中

美浦村文化財協力員，動物考古学会会員 阿部きよ子

1. 貝塚を残した縄文人

石岡市内の貝塚と貝が出土した遺跡を調べたところ13か所ありました(資料1)。そのほとんどが縄文時代のもので、では、縄文時代以外の時代は貝を食べなかったのでしょうか。今も、魚屋やスーパーでは貝が売られていますし、寿司屋へ行けば何種類かの貝が食べられます。近所のお年寄りは昔、タンカイをとって煮て食べていた、川へ遊びにいけばシジミをとってきた、田んぼでタニシをとっていたなど、日常的に貝をとって食べた話をしてくださいませ。でも、石岡に限らず、全国的に、貝塚の多くは、縄文時代のもので、

食べた貝の殻を川や海に捨てたら陸上には残りません。そのつどあちこちに生ごみとして埋めていても、酸性土壌の日本では、そのうちにすっかり土に還ってしまいます。いつでもどこでも、そうしていたかはわかりませんが、縄文時代の人たちは一定の場所に続けて貝殻を廃棄しました。その結果が貝塚です。貝塚は、縄文時代の人々特有の廃棄の仕方や、考え方によってできたものといえるでしょう。貝殻から溶け出す成分のおかげで、動物遺体(貝殻、動物の骨、人間の骨、ウニの殻、イカの甲羅、カニの爪など)が数千年たっても貝塚に残りました。縄文人が貝塚を遺したおかげで、文字の記録のない数千年前の縄文時代の人々の食生活などの様子を覗くことができるのです。また、貝塚は自然環境を知る上でも貴重な情報源となっています。

2. 三村地蔵窪貝塚

石岡市内には、近年発掘調査が行われた大きな貝塚が2か所あります。その一つが三村地蔵窪貝塚です。三村地蔵窪貝塚は出土する土器から縄文時代早期後葉(約8千年前ごろ)のものと推定されています。慶応高校考古学会が1955年に、1993年から1994年にかけて山武考古学研究所が発掘調査をし、いずれも調査翌年に報告書が出されています。それによると、急傾斜の斜面の落ち込みにブロック状の貝のまとまりが集積した状況だったとされ、(資料2, 3参照)、1995年の報告書では貝層は幅が平均3m、長さは10m30cm、深いところで1m19cmの厚さと記されています。

出土した遺物は石岡市に保管されているので、数年前、貝の組成を調べさせていただきました。また、同定した未報告記録があり、動物遺体の様相がおおよそつかめます。そこでわかったことをまとめてみます(資料2, 3)。

貝では、わずかに淡水貝のカワニナ、イシガイ科、汽水にすむイシマキガイが検出されていますが、ほとんどが海の貝、それも内湾の干潟に棲む貝です(資料2, 3参照)。ハマグリが最も多く、マガキ、ハイガイがそれに続きます。美浦村陸平貝塚のほぼ同時期の貝組成も似ており、中期の貝塚と比べると、マガキとハイガイの比率が高いといえます。ハマグリは砂質の干潟の貝ですが、マガキやハイガイは泥質干潟に多く棲息します。ハイガイは暖海に棲む貝で、中期以後の霞ヶ浦沿岸貝塚では姿を消します。地蔵窪貝塚ができた時期の気候が今より温暖だったと推定されます。マガキは何かにつけて成長する貝です。カキ礁とよばれるマガキの上にまたマガキがついていく場所では、かなり大きなサイズになりますが、ここのマガキは今販売されているカキより小さなサイズなので、干潟に転がる石についたりして育ったものが多いのではないかと考えられます。数は少ないですが、食べる部分では大型巻貝のアカニシが一定数出土しています。この貝は干潟の二枚貝を食べる貝で、今も高級食材です。氷河時代が終わってからは、温暖化にともない海水面が上昇します。そのピークは縄文時代前期前葉と推定されていますが、早期後葉のこの時期には、海水が浸入した河口付近に出現した泥い干潟と、砂質の干潟が近くにあったことがわかります。

食用ではない貝も出土しました(資料3貝製品)。ツノガイとヤカドツノガイをビーズに加工したものが出土しています。ヤカドツノガイは浅いところに棲むので、浜辺で貝殻を採取できますがツノガイの生息域は深いので、浜辺でみかけることはめったにありません。陸平貝塚の後期の貝層から出土したツノガイ類は化石の貝を利用していましたが、地蔵窪のツノガイ類もその可能性が高いと思われる。縄文時代の始めから縄文人が好んで使用したツノガイ類を、この地域の人たちも入手し、そのビーズを愛用していたことがわかります。フネガイ科(サルボウ、アカガイなど)を加工した貝輪も出土しています。

魚骨からわかった魚種をみると霞ヶ浦沿岸の貝塚の多くと同様、内湾にすむ魚が中心です(資料4)。他の貝塚では見られないカマスの骨が多いことは注目されます。コチ(マゴチ)も目立ちます。一方、陸貝貝塚の早期の層でも一定数が見られ、中期以後の霞ヶ浦沿岸の貝塚で多数検出されるウナギやハゼが検出されていないこと、大谷貝塚などの前期や上高津貝塚などの後期の貝層で目立つマダイがほぼ見られないことがこの貝塚の特徴といえます。また、コイ科などの淡水魚は検出されていません。川に魚や貝をとりに行くことはあまりなかったのでしょうか。

獣骨も出土しています(資料5, 6)。いずれも霞ヶ浦沿岸貝塚で普通にみられる種類ですが、猪が主で、鹿が少いです。犬は狩猟用に飼育されていたものでしょう。鳥の骨では、霞ヶ浦沿岸の他の貝塚ではカモが多いのに対して、キジが多いことが特徴です。蛇、亀、カエル、ネズミ、モグラの骨が出土しています。これらは、自然死したものかもしれませんが、蛇の骨は他の貝塚と比べてとても点数が多く、サイズも大きいので、食べていたかもしれません。他に、カニの鉢も見ついています。石鏃も出土しており、弓矢や罠、犬も使って猪猟、ウサギ猟、キジなどを獲っていたと推定できます。

3. 東田中遺跡の貝塚

茨城県教育財団が、2011年から断続的に広い東田中遺跡を発掘調査した中で2か所の斜面に貝が大量に堆積した貝層が発見され、貝塚部分の全層が取り上げられました。2か所ともに共存する土器から縄文時代中期後葉(約4千300年前)の貝塚と推定されています。地蔵窪貝塚と同様、かなり急な斜面の窪地に貝が堆積していました。調査報告書に基づいて貝や骨などの出土内容を見ると、いくつかの特徴が見えてきます。

霞ヶ浦沿岸の多くの貝塚と同様、貝のほとんどは内湾の干潟に棲む貝です(資料7)。霞ヶ浦沿岸の縄文時代中期の貝塚では砂干潟にすむハマグリ、シオフキ、サルボウが代表種で、泥干潟は中期には後退していたと指摘されています。東田中でもこの3種がとられています。マガキ、ウミナ、ナミマガシワが主体となる層があるという特徴があり、カワアイという河口付近に近い小巻貝も一定量採取されています。湾奥の東田中付近では中期にも泥干潟が広がっていたと考えられます。

潮干狩りに干潟にできれば、1か所で同じやり方での種類も揃うわけではありません。マガキは何かにつ

いて育つ貝です。葦や流木、石ころ、貝殻についたり、かき礁となつてかたまりあったりします。道具を使ってカキ殻のかたまりを崩したり、岩などから剥がしとって採取したことでしょう。ウミナは干潟の表面で這っている小さな巻貝です。潮が多少退いているときに歩けば拾い集めることができます。ナミマガシワが主体の層があるというのは、霞ヶ浦沿岸貝塚でも全国的にも珍しく、東田中の特徴といえますが、この貝は石ころや岩などに、右の殻の穴から固い足石を出して、しっかりとりついて育ちます。附着したものとると、道具を使って剥がして獲ることになるでしょう。ハマグリやシオフキは砂にもくっついているので、掘って探して獲ることになりますが、潮があまり引いていないときは、海に入って、あるいは舟から熊手、丈夫な籠や笊に棒をつけたような道具で掘り獲ったでしょう。縄文人は貝それぞれの生態を熟知して採取していたと考えられます。子どもたちも貝採取では活躍したと考えられます。

早期の三村地蔵窪貝塚では少しまざっている程度だったウミナが多い点では、食文化の変化が推測されます。三村城の調査で見つかった縄文時代中期の土坑からもウミナが出土しましたが、みな殻頂部を欠いた状態でした(資料9)大谷貝塚でも、前期の層ではほんの少し混ざる程度なのが、中期には集中して出土する層があり、やはり殻頂部が欠けています。お年寄りから殻の先を欠いて煮たものを殻口から吸って食べたとか聞いたことがありますが、こうしたウミナの食文化は縄文時代中期からではないかと推定できます。

食用ではない貝、貝製品も出土しました。アカニシ、イタボガキを貝輪(腕輪)にしたものが出土しています。ツノガイ類がまとまって出土した層もあり、これは地蔵窪と同様ビーズとして使用したと考えられます。房総半島南部以南のさんご礁などに棲む大型のタカラガイも出土しました。タカラガイは縄文時代の日本をはじめ、世界的に、広く流通した、文化的価値のあった貝です。チョウセンハマグリを縁を加工した貝刃も出土していますが、この貝は鹿島灘などに現在も棲息する外洋に面したところに棲む貝です。タカラガイ、チョウセンハマグリは人が運んできたものです。

魚の種類も多くは霞ヶ浦沿岸の他の貝塚と同様、内湾に棲む魚です(資料10)。地蔵窪貝塚と比べて、ウナギ、ハゼが増えています。一方、前期や後期に霞ヶ浦沿岸貝塚で多く出土するマダイがほとんど見られませんでした。

コイ科、ギバチなど淡水魚も見られません。

漁具としては釣針とヤス、土器片錘(網の錘とされる)が出土しています。ニシン科(マイワシ、サッパ、コノシロなど)やアジなど、群れで湾内に回遊する魚は網で獲ったのでしょうか。エイ、コチ、カレイやヒラメ、クロダイなどは、ヤスで突いたり、釣りで獲ったのではないのでしょうか。ウナギ、ハゼの増加は霞ヶ浦沿岸全域の中期からの特徴ですが、粗朶を沈めたり、竹筒など畏的なものを設置しておけば簡単にとれるので、そうした漁法がこの時期盛んになった結果、増えたのではないかと考えています。ウナギは川や池にもいますが、海で一生すごすものもいるので、川や池での魚とりをしたかどうかはわかりません。

獣骨も出土しました(資料11)。猪の骨が出土点数193と最も多く、33個体分の歯などを調べた結果では幼獣が19、成獣9、年齢不明5と、幼獣の比率がとても高い点が注目されます。鹿などには幼獣がかかりやすいものですが、それにしてもこの比率は特異です。他の霞ヶ浦沿岸貝塚と比べると鹿がたいへん少ないことと、ノウサギが比較的多い点が目立ちます。鳥の骨では他の貝塚と同様カモの仲間が最も多いのですが、地蔵窪と同様キジが多いこと、スズメ目の小鳥も一定量あることが注目されます。弓矢、民狐、犬を伴っての狩りが行われていたことでしょう。

貝層の中から人骨11点(うち4点は同一層内の乳歯、最小個体数3)出土しています。貝層内に埋葬された骨が斜面の崩壊などで散在したと考えられます。貝塚は、単なるゴミ捨て場ではなく、命を失ったものたち、大切な宝などを「送る」場ではなかったかと考えられます。

縄文人は自分達が食べた生き物を、親密な大切なもの、また戻ってきて欲しいものとしてとらえていたのではないのでしょうか。

4. おわりに

以上2つの貝塚の動物遺体の特徴をみてきました。石岡は古霞ヶ浦湾の奥に位置しますが、縄文時代早期から多種類の貝の棲む豊かな干潟があり、海の魚が棲息していたことが貝塚出土の動物遺体からわかります。縄文早期と中期の間には数千年の時間の隔たりがありますが、2つの貝塚の立地や堆積状況が似ており、マガキを多く採取し、イノシシ中心の狩猟だったなど、動物の利用についても、多くの共通点が見られることは、興味深いことです。

古霞ヶ浦は気候の変化による水位の低下や河川が運ぶ土砂で浅くなり、湾口の砂州の拡大などで、汽水化していったと考えられていますが、常陸国風土記には浮島(現稲敷市)で塩を生産していたことが記され、古代には製塩可能な海だったことがわかります。江戸時代以前と推定されている中津川遺跡の土坑で出土した貝は、ほとんどが汽水域に棲むヤマトシジミで、淡水にすむオオタニシもあります。ウミナナも少量出土しました。恋瀬川河口付近の汽水域が縄文時代より拡大していたかと思われませんが、ウミナナがとれる海辺が近くにあったことが推定できます。しかし、江戸時代の国術跡の土坑から出土した貝はヤマトシジミだけでした。17世紀からの利根川流路の変更などで霞ヶ浦はすっかり汽水湖になったと推定されます。そして、1970年代の常陸川水門設置、閉鎖で霞ヶ浦は完全に淡水湖となりました。地蔵窪貝塚のころは推定30m位の水深だった海が、今では平均水深4mという浅い淡水湖になったのです。さになり、水質悪化などもあって、魚も種類、量ともに激減しました。

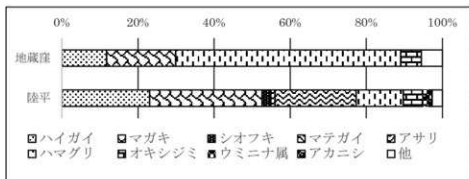
霞ヶ浦沿岸には、明治時代から多くの研究者が訪れ貝塚探訪記録を残していますが、詳細な調査記録は少なく、とくに、縄文早期の貝塚の調査例はわずかしかなりません。今回紹介した2つの貝塚の貴重な資料の活用が望めます。貝塚出土の動物遺体は、縄文人の命を支えた海の幸、山の幸について語ってくれます。数千年前のこの地の景観と縄文人の暮らしを思い浮かべてみましょう。縄文人は何をし、どんなことを願いながら暮らしていたのでしょうか。数千年前のことを想像しながら、私たちの今後の暮らしかたや自然との付き合いかたについて考えてみたいものです。

文献

- 慶應義塾高等学校考古学会 1956 『茨城県石岡市三村字地蔵久保三村貝塚発掘報告』Arcaeology23
- 石岡市教育委員会 1995 『茨城県石岡市地蔵平遺跡・地蔵窪貝塚発掘調査報告書』
- 作山智彦・見越広幸 2019 『東田中遺跡2』茨城県教育財団文化財調査報告第434集
- 茨城県史編さん第一部会 1979 『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』
- 阿部芳郎編 2018 『霞ヶ浦の貝塚と社会』雄山閣
- 阿部きよ子 2017 『霞ヶ浦周辺貝塚の動物遺体』『考古学ジャーナル』No.694

遺跡名	所在地	推定時期	様相	貝生息域
高根貝塚	染谷高根	縄文・早期	斜面にブロック状に貝層点にか	鹹水
三村地藏窪貝塚	三村地藏窪	縄文・早期	斜面にブロック状に貝堆積	鹹水
餓鬼塚遺跡	染谷餓鬼塚	縄文・早期か	詳細不明、土器は早、前、中期	不明
後生車古墳群	染谷後生車	縄文・早、前期	早期の炉穴内、前期住居址内	鹹水
東田中遺跡	東田中	縄文・中期	2か所の斜面貝塚 最近発掘調査	鹹水
別所貝塚	石川別所	縄文・中期か	十王遺跡の一部。詳細不明	不明
三村城跡	三村	縄文・中期	袋状土坑の上部に貝の多い層	鹹水
富士台貝塚	石川富士台	縄文・中後期か	詳細不明	鹹水
大方貝塚	三村大方	縄文・中後期か	詳細不明	鹹水
北垂貝塚	石川北垂	縄文・後期	台地縁から緩斜面	鹹水
道場平貝塚	石川道場平	縄文・後期主	北垂貝塚の一部ともされる。	鹹水
中津川遺跡	中津川	江戸時代以前	土坑から貝（縄文土器、須恵器共伴）	汽水
常陸国衙跡	総社	江戸時代	土坑から貝出土	汽水

資料1 石岡市内の貝塚、貝が出土した遺跡



資料2 グラフ 地藏窪貝塚の貝組成（陸平貝塚早期貝層と比較して）

比較対象貝塚の位置



ハイガイ、シオフキ、オキシジミ、アサリ、マテガイ、ハイガイ、イセエビ科のヒメエビ、ハナガシ、イセエビ、スズメ、タマガイ、ホトアサリ



ツンガイ、ヤマトツンガイ製ビーズ



フネガイ科の貝の貝軸片



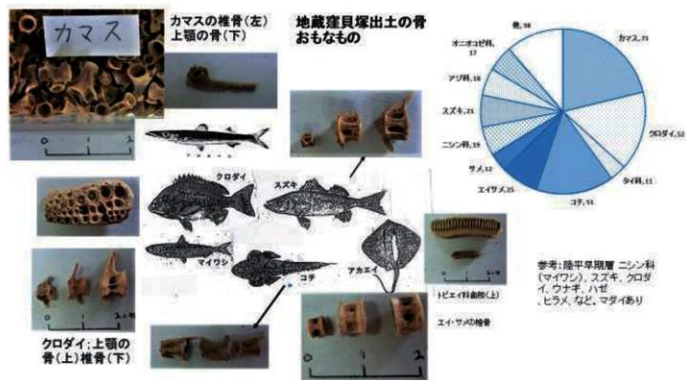
ハマグリ製貝刀

資料3 地藏窪貝塚 貝層出土状況、

おもな貝

貝製品

資料4 地蔵窪貝塚出土魚骨の様相



イノシシ	シカ	ノウサギ	イヌ科、イヌ	タヌキ	キツネ	イタチ	ネズミ	キジ
34	4	5	5	10	1	1	18	13

資料5 地蔵窪 出土獣、鳥 (推定最小個体数)



資料6 地蔵窪貝塚の獣骨、蛇、蟹、狩猟漁具

石岡市鹿の子

石岡市教育委員会 谷村俊雄

遺跡の概要

鹿の子遺跡は、茨城県石岡市鹿の子から若松にかけて所在する遺跡です(図1)。昭和54年から57年にかけての常磐自動車建設に伴う発掘調査(鹿の子C遺跡)では、大量の漆紙文書の出土したことから「地下の正倉院」と呼ばれ、延暦年間(782~806年)の蝦夷戦争に伴う武器等の生産工房と評価されています。

鹿の子遺跡における調査は、その後も住宅や店舗、学校建設等の開発に伴い継続して行われ、奈良・平安時代を中心に多くの遺構が発見されています。平成23年度に実施した第30次・第38次調査では、縄文時代の狩猟用の「落とし穴」(図2)を発掘しました。

遺構の概要

第30次・第38次調査は、個人住宅建設に伴い、住宅建設部分を対象に、石岡市教育委員会が実施しました。

第30次調査は、平成23年9月に実施しました。調査面積は76㎡で、平安時代の竪穴建物跡2棟(SI01, SI02)、縄文時代の落とし穴1基(SK02)などを検出しました(図3)。

第38次調査は、第30次調査地点の西側隣接地で、平成24年1月に実施しました。調査面積は90㎡で、平安時代の竪穴建物跡2棟(SI01, SI02)、縄文時代の落とし穴2基(SK04, SK05)などのほか、縄文時代の炉穴(SK08)と考えられる跡も検出しています(図4)。

縄文時代の落とし穴は、長軸1.6~1.9m、短軸0.95~1.15mの楕円形です。深さは1~1.7mで、底にいくほど穴の幅が極端に狭くなっており、落ちた獲物が動けないように工夫がされています。遺物は出土していないため詳細な時期はわかりませんが、同様の形のもの、縄文時代前期後半から中期後半にかけてみられます(今村1994、佐藤2000、中村2007)。

遺跡の評価

常磐自動車道建設に伴う発掘調査(鹿の子C遺跡)でも「縄文時代の陥し穴状遺構」が確認されています(図2左、茨城県教育財団1883)。また、「縄文時代の遺物(主として前期)も出土し、竪穴住居跡とみられる遺構の存在

も確認している」ようですが、調査期間等の関係で奈良・平安時代以外の遺構についてはほとんど調査を行うことができなかったようです(川井1995)。

落とし穴を検出した第30次・第38次調査地点やその周辺は、南東に谷地形があるものの、標高25m前後のほぼ平坦地となっています。しかし、周辺の試掘調査の結果によれば、西側は浅い凹地(埋設谷)となっています。特に、第38次調査地点では北西から南東へと入り込んでおり、落とし穴は浅い凹地(埋設谷)の縁辺部および谷頭に位置していることとなります(図5)。

落とし穴の配置は、規則的なものではないことから、追込み猟に使用したものとは考えにくいものです。凹地周辺に位置していることから、豪雨などによって凹地に溜った水を求めて参集するイノシシやシカなどの獣のとおり道(ケモノ道)に仕掛けたものと想定できます(大成エンジニアリング2013)。

試みに落とし穴の長軸と直交する線を引き、水場のある凹地の方向へ矢印を引くと、水場へと参集する「ケモノ道」の様子と、さらにはそれを狙った縄文人の「作戦」が浮かび上がってきます。

開発に伴う調査は、限られた調査面積となりますが、それらをつなぎ合わせていくことで、豊かで具体的な歴史を復元していくことができます。

文献

- 茨城県教育財団1983『鹿の子C遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第20集
- 今村啓爾1994『陥穴』『縄文文化の研究2 生業』雄山閣
- 川井正一1995『鹿の子C遺跡—蝦夷征討のための武器工場—』『石岡市の遺跡—歴史の里の発掘100年史—』石岡市教育委員会
- 佐藤宏之2000『北方狩猟民の民族考古学』北海道出版企画センター
- 大成エンジニアリング編2013『武蔵国府関連遺跡調査報告—「プレミアムレジデンス府中西府駅前」新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—』三信住建株式会社
- 中村信博2007『関東地方の陥し穴』『縄文時代の考古学5 なりわい—食料生産の技術—』同成社

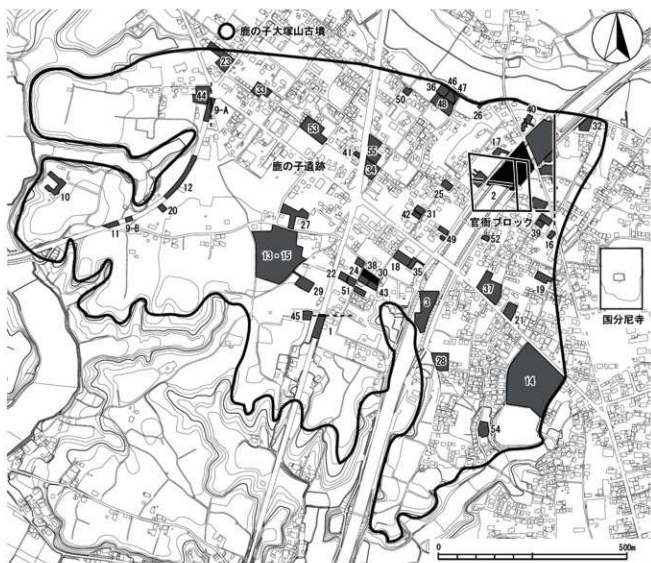


図1 鹿の子遺跡 全体図 (S=1/10,000) ※黒塗りは落とし穴検出地点

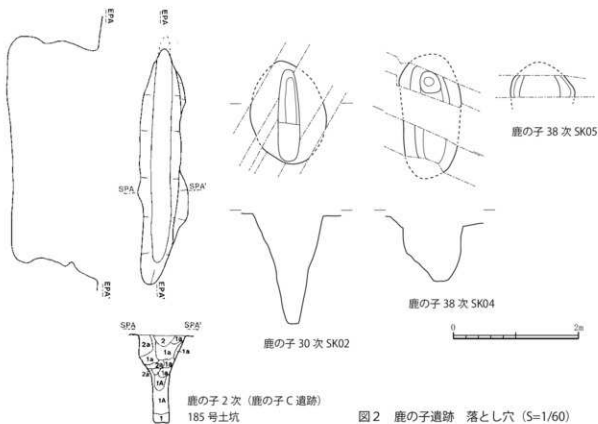


図2 鹿の子遺跡 落とし穴 (S=1/60)

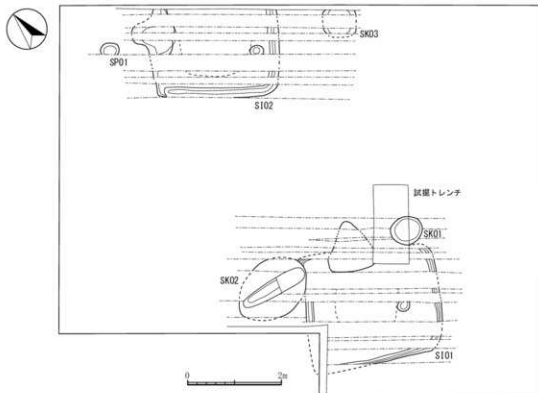


図3 鹿の子遺跡 第30次調査地点 (S=1/80)

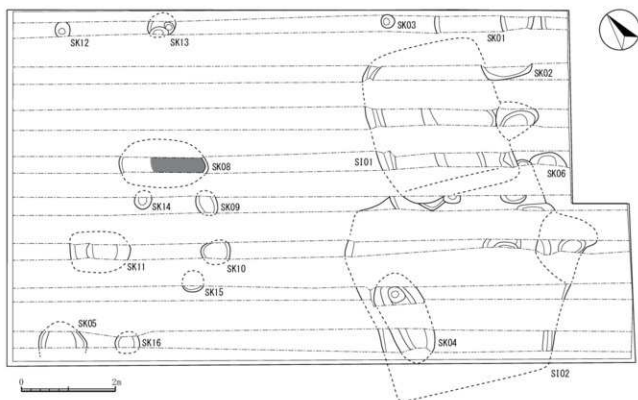


図4 鹿の子遺跡 第38次調査地点 全体図 (S=1/80)

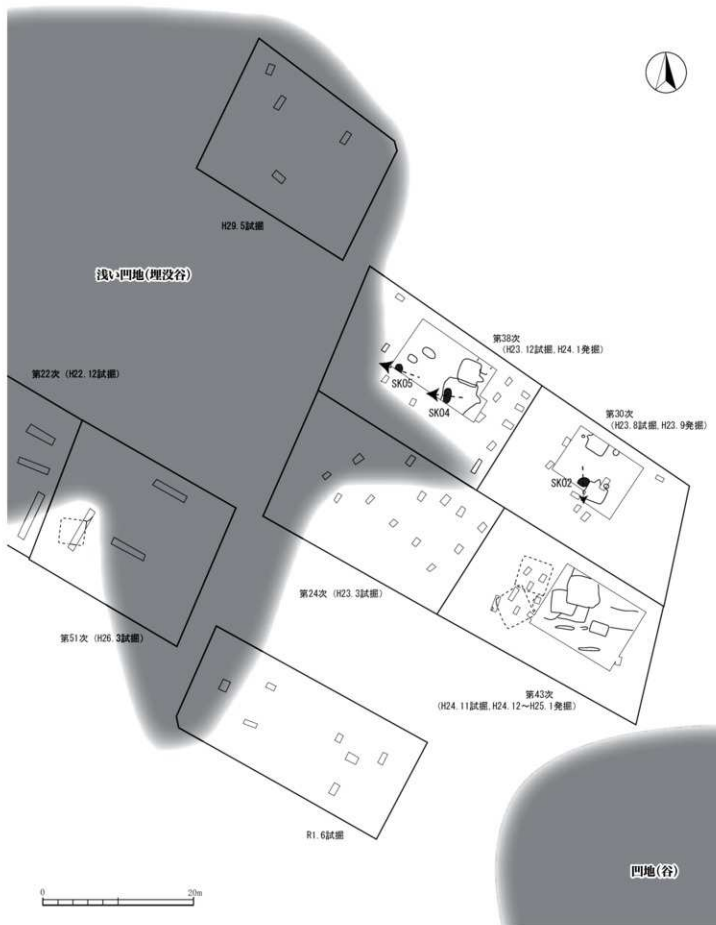


図5 鹿の子遺跡 落とし穴の分布 (S=1/500)

石岡歴史年表

時代	年	日本の主なできごと	石岡の主なできごと
旧石器時代		・採集や狩りで生活する	・旧石器など
		・石器などがつくられる	【下ノ宮遺跡・宮平遺跡・半田原遺跡など】
縄文時代		・土器や石器、弓などを採集や狩りなどで生活をする	・縄文土器や住居跡、貝塚など 【三村地藏窪貝塚・東大橋原遺跡・東田中遺跡など】
弥生時代	200	・米作りが日本各地に広まる	・弥生土器や住居跡など
	300	・卑弥呼が魏に使いを送る（239）	【外山遺跡・新池台遺跡など】
古墳時代	400	・大和朝廷の全国統一	・初期の古墳が造られる【丸山古墳・佐自塚古墳など】
	500	・前方後円墳が全国に広がる	・大型古墳が造られる【舟塚山古墳・府中愛宕山古墳など】 ・各地に古墳群や埴輪が作られる【西町古墳の鹿埴輪など】
飛鳥時代	600	・聖徳太子が摂政になる（593）	・常陸国が誕生し、石岡地方は茨城郡となる
	700	・大化の改新（645）	・常陸国を治める役所国衙が石岡に置かれる ・茨城郡を治める役所郡衙が茨城に置かれる
奈良時代		・平城京（奈良）遷都（710）	・常陸国風土記がこの頃完成する
		・古事記、日本書記、万葉集ができる	・国分寺・国分尼寺の建設が始まる
		・東大寺の大仏開眼式（752）	【国分寺・国分尼寺跡、瓦塚窯跡】
		・蝦夷征討（東北地方の平定）	・蝦夷征討の基地となる【鹿の子遺跡・漆紙文書】
平安時代	800	・平安京（京都）遷都（794）	・常陸國總社宮などの神社、西光院などの寺がこの頃できる
	900	・武士団が各地に生まれる	
		・平将門の乱が起こる（935）	・平将門が、常陸国府を焼き国印などを奪う（939）
	1000	・藤原道長が摂政となる（1016）	
	1100	・平清盛が太政大臣になる（1167）	・源頼朝が、常陸国府に来て佐竹氏を攻める（1180）
鎌倉時代	1200	・源頼朝が征夷大将軍となる （1192）	・馬場（大掾）資幹、府中の地頭を認められる（1214） ・浄土真宗開祖親鸞が、石岡地方にも来訪する
	1300	・鎌倉幕府が滅びる（1333）	・北朝方の佐竹氏が石岡城に迫る 国府原合戦（1337）
室町時代		・足利尊氏が征夷大将軍となる （1338）	・大掾高幹、北朝方に転じる（1338） ・大掾詮国が旧国衙の地に府中城を築く（1346）
	1400	・応仁の乱が起こる（1467）	
	1500	【戦国時代】	・太田資正（三楽齋）、片野城に入る（1564）
安土桃山時代		・織田信長が室町幕府を滅ぼす （1573）	・大掾清幹が佐竹氏に攻められ、大掾氏滅亡する（1590） 【石岡地方は佐竹氏の完全な支配となる】
		・豊臣秀吉が全国を統一する（1590）	・石岡地方にも検知が行われ、茨城郡から新治郡になる
	1600	・関ヶ原の戦い（1600）	（1594）
江戸時代		・徳川家康が征夷大将軍となる （1603）	・六郷政乗が府中へ移る（1602） ・片野城に滝川雄利が入る（1603） ・皆川広照が府中へ移る（1623） ・一里塚が主要街道に設けられる
		・鎖国が完成する（1641）	・徳川光圀の弟松平頼隆が府中松平藩主となる（1700）
		・各地で新田の開発が行われる	・府中平村（現在の石岡の中心部）大火（1728）
	1700	・国学や蘭学が盛んになる	・高浜・石川に河岸門屋組合が結成される（1782）
	1800	・江戸を中心に町人の文化が栄える	・陣屋門が建てられる（1828） ・改革組合村柿岡五十三か村組合が成立する（1829）

江戸時代		<ul style="list-style-type: none"> ・ペリーが浦賀に来る(1853) ・安政の大獄・桜田門外の変(1860) ・徳川慶喜が大政奉還をする(1867) 	<ul style="list-style-type: none"> ・都々一坊扇歌、府中平村にて亡くなる(1852) ・佐久良東雄、桜田門外の変に連座して捕まり、獄で食を断ち亡くなる(1860) ・天狗党事件、染谷や府中宿が焼打ちされる(1864)
明治時代	1900	<ul style="list-style-type: none"> ・明治維新、江戸を東京とする(1868) ・廃藩置県(1871) ・学制が公布される(1872) ・大日本帝国憲法が公布される(1889) ・日清戦争(1894~1895) ・日露戦争(1904~1905) 	<ul style="list-style-type: none"> ・府中藩が石岡藩と名前を変え、府中平村も石岡と名前を変える(1869) ・石岡地方は、新治県となる(1871) ・茨城、新治の両県を合併し、茨城県となる(1875) ・石岡醤油醸造組合が設立される(1886) ・石岡・高浜・柿岡町、関川・三村・園部・瓦会・林・恋瀬・葦穂・小幡・小桜村が誕生する(1889) ・この頃、各地に尋常小学校や高等小学校ができる ・石岡図書館が創設される(1889) ・明治天皇、陸軍大演習のため、園部村に行幸(1890) ・石岡駅・高浜駅完成(1895) ・真家信太郎、野菜促成栽培の試作に着手(1901) ・常陸國總社宮まつり年番制度確立(1902) ・国分寺から出火150戸焼失、仁王門など焼失(1908)
大正時代		<ul style="list-style-type: none"> ・韓国併合(1910) ・関東大震災が起こる(1923) ・普通選挙法公布(1925) 	<ul style="list-style-type: none"> ・新治郡立農学校(現石岡一高)創立(1910) ・石岡に電灯がともる(1911) ・町立石岡実科高等女学校(現石岡二高)創立(1911) ・柿岡に地磁気観測所設置(1913) ・羽成卯兵衛、八木干拓工事に着手(1920) ・町立石岡図書館となる(1923)
昭和時代		<ul style="list-style-type: none"> ・満州事変(1931) ・日中戦争(1937~1945) ・太平洋戦争(1941~1945) ・日本国憲法が公布される(1946) ・義務教育が六三制となる(1947) ・サンフランシスコ平和条約(1951) ・東海道新幹線開通(1964) ・東京オリンピック(1964) ・札幌冬季オリンピック(1972) ・沖縄日本に復帰する(1972) ・日中平和友好条約(1978) ・つくば科学万博(1985) 	<ul style="list-style-type: none"> ・石岡町大火、中町より出火約600戸全焼(1929) ・鹿島参宮鉄道全線(石岡~鉾田)開通(1929) ・半ノ木に大日本飛行協会の中央滑空訓練所建設開始(1940) ・小学校・中学校の開校(1947) ・高浜町、石岡町に編入(1953) ・石岡市誕生(2月)、三村・関川村編入(12月)(1954) ・山根1町7村が合併し、八郷町誕生(1955) ・県立八郷高校創立(1963) ・県立石岡商業高校創立(1964) ・市民会館完成(1968) ・柏原工業団地完成(1972) ・茨城国体開催、バドミントン会場(1974) ・市立図書館完成(1980) ・常磐自動車道石岡まで開通、八郷町中央公民館完成(1982) ・茨城県フラワーパーク開園(1985)
平成時代	2000	<ul style="list-style-type: none"> ・阪神・淡路大震災(1995) ・長野冬季オリンピック(1998) ・サッカーワールドカップ韓国と共同開催(2002) ・東日本大震災(2011) 	<ul style="list-style-type: none"> ・八郷温泉ゆりの郷オープン(2000) ・石岡市と八郷町が対等合併し、新石岡市が誕生(2005) ・鹿島鉄道廃止(2007) ・東日本大震災で被害を受ける(2011) ・朝日トンネル開通(2012)

『ふるさと学習—石岡を学ぶ—』(平成28年4月発行)より一部改変

第5回 石岡市文化財調査報告会
発表要旨

2019（令和元）年8月3日発行

- 編集 石岡市教育委員会 文化振興課
- 発行 石岡市教育委員会
〒315-0195 茨城県石岡市柿岡5680-1
常陸風土記の丘
〒315-0007 茨城県石岡市染谷1646
- 印刷 共和印刷株式会社
〒315-0001 茨城県石岡市石岡2747-68
-